

# エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第104号(通巻第164号)  
2013年7月18日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山  
複合施設301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常  
駐していません) e-mail qqh43+dd@train.ocn.ne.jp  
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

## 多摩の市民発電所 第1号機、発電開始!

一般社団法人・多摩循環型エネルギー協会の下にできた多摩電力合同会社が、最初に設置した太陽光発電が初めて



テープカットする阿部市長と川島学長

発電し、東京電力の電線に送る「発電開始式」が7月6日午前、恵泉女学園大学の南野校舎で行われた。

発電設備そのものは2カ月前に整備され、いつでも発電OKの状態だったのだが、東電

の受け入れ電気工事の都合で同社への“通電開始”が遅れていたもの。

この日は阿部裕行市長を始め、恵泉大の川島堅二学長も顔を見せ、多摩エネ協関係者とともにテープカットをして通電を祝った。

テープカットのあと、川島学長は「学校が少しでも地域にお手伝いできたらうれしい。こうした試みが全国に広まればいいと思っている」と挨拶。阿部市長も「地域のなかでエネルギーの地産地消が歩み始めたことに、敬意を表したい。こういった発電所がもっとも増えることを願っている」と語った。

また、この開始式と、そのあとの市民交流会(エネ・カフェ)に参加した市民は約60名(エネ協スタッフ15名)。交流会のあとに、1990年代にドイツで市民たちが始めた地域発電所の誕生プロセスを追ったドキュメンタリー映画「シェーナウの想い」が上映された。

なお、第2号発電所は市内聖ヶ丘2丁目に最近オープンした老人養護施設「ゆいま〜る聖ヶ丘」の屋上に決まった。出力は1号発電所の2倍以上の約70kW級とのこと。

### ■たまでん第1号発電施設の概要

発電事業者:多摩電力合同会社(多摩市落合1-46-1

コリア多摩センター4F 施工業者:ジャパン・ソーラー(株)



建物の部分:恵泉女学園大学南野校舎(多摩市南野2-11)

屋上面積:500㎡

設置パネル:定格出力30kW

工期:2013年3月~4月

売電の種類:東京電力への全量売電(固定価格全量買い取り制度を利用)

資金調達方法:少人数私募債「たまでん 恵泉女大の川島学長 第1号建設債」



## エネルギー&エコの出前授業、北諏訪小で

多摩ではおそらく初めてとなる「エネルギーとエコ」に特化した環境教育が7月16日、市立北諏訪小学校で行われた。対象は4年生の3クラス84名。1~2時間目の理科の授業で、多摩循環型エネルギー協会 の山川勇



屋上のパネル前で説明を受ける

一郎、中瀬剣正さんの二人が地域コーディネーターの江川美穂子さんとともに学校を訪れた。

北諏訪小学校には、屋上に出力10kWの太陽光パネルが設置されているが、ふだんは「触って感電したりしたらたいへん」との配慮で生徒たちは屋上に立ち入れないようになっている。この日はまず、この太陽光パネルを実際に見て、説明を聞くことから始まった。

そして、多目的室に移動。ここからは1から4までの場所をつくり、生徒は山川先生の出題に対して自分の正しいと思う答えの場所に移動する。出題のテーマは創エネと省エネ、そして世界と日本の両方を含むという内容。

Q1 日本人がふだん行っているエネルギー生活を全世界の人が行ったら地球は何個必要になるか?

答え①0.5個 ②1.25個 ③2.4個 ④5.8個

この答えでは意外にも③の正解に集まる生徒が一番多かった。生徒はすでに勉強していたのかな。ちなみに“中瀬博士”の解説では④はアメリカ、②は世界全体で、すでに許容量をオーバーしている状態。①に行った生徒0。

Q2 太陽光、風力、地熱など日本の自然エネルギーの発電量全体に占める割合はどのくらい?

答え①1.6% ②4.4% ③14.7% ④18.5%

正解は①でまだまだ少ない。②はアメリカ、③はドイツ、④はスペインで、全体では欧州が先行している。

Q3 日本で自然エネルギーで発電している割合が一番多い県はどこ?

答え①北海道 ②大分県 ③東京都 ④長野県

正解は②で25%も発電、北海道は意外と少なく3.38%。

Q4 この学校の発電量は10kW。これを馬力に換算すると何頭分になるか?(ここから3択) 答え①3頭 ②7頭 ③30頭 正解は②で、発電するのはそれだけ大変だということ。最後に2年前の原発事故後の夏の節電で削減された電気量の問題を出し、正解は17%。それだけみんなが節電に励めば達成できるんだ、との話で締めくくられた。



右奥が山川先生、手前が中瀬博士

## 今年も大栗川の「水辺まつり」にぎわう



工事の重機がすぐ手前まで迫った行事

なかには市役所の若手職員有志も数人参加してくれ、きびしい持ち場を若さで担ってくれた。

今年の大栗川は、長いあいだ雨が降らなかったため、川面はやや透明度に欠けていたが、オリのようなものは少なく、開催にはそれほど問題はなかった。左岸の護岸緑化工事もすぐ手前まで迫っていたが、こちらもいかだ下りにはなんの影響



バランスをくずして川に落ちる参加者も

ペットボトルなど450入りの袋で3袋以上を収集。

そして3~4名ずつでチームを組み、試漕を2回行い、決勝のタイムトライアルに臨んだ。なかにはバランスをくずして、全員が川のなかに投げ出されたり、漕者同士の息が合わずにちっとも前に進めないチームなども続出。相変わらずのいかだトライアルだった。



力持ちスタッフが子どもを川に投入

レース後は、昼食時まで川のなかで遊び放題。今回はスタッフが子どもを持ちあげて川のなかに投げ飛ばす「サービス」を行ったところ、これが大受けして「もう一度やって！」とリクエストをせがむ子も多かった。さて来年は、会場の左岸はどんな風景に変わっているのか。その新しい施設がどう利用されるのか、いまから楽しみでもある。

## 森・土・海は 食のゆりかご 命のゆりかご

タイトルのようなトークイベントが7月6日、東京農業大学・百年記念講堂で開かれた。ここには「森は海の恋人」のカキ養殖業者、畠山重篤さん、おいしい牛乳づくりを実践する山地酪農家の中洞正さん、「奇跡のリンゴ」のリンゴ農家、木村秋則さんの3人が出演。それぞれの持論を、満席の農大生を相手に思う存分語った。今回はそのなかで最初に登壇した畠山さんの持論を抜粋して掲載したい。

畠山さんのプロフィールは、宮城県立気仙沼水産高校を卒業後、家業のカキ養殖業を継ぐ。海の環境を守るには海に注ぐ川、さらにその上流の森を守ることの大切さに気づき、漁師仲間とともに「牡蠣の森を慕う会」を結成。1989年より気仙沼湾に注ぐ大川上流部で、漁民による広葉樹林の植林活動「森

は海の恋人活動」を行っている。東日本大震災でカキ養殖場の施設をすべて失うが、コンクリートの防潮堤に頼らず、震災後の自然環境を生かした地域づくりを進めている。

1994年朝日森林文化賞、2003年に緑化推進功労者内閣総理大臣表彰を受け、震災後に国連森林フォーラム(UNFF)のフォレストヒーローズ賞受賞。海を豊堯にするのはじつは鉄分、中学生の頃にカキ博士の今井先生から聞いた「森には魔法使いがいる」という言葉が焼き付いて離れなかった。

その後、長い時間をかけて「鉄が不足すると海藻が生えなくなる」「鉄分が海中の植物プランクトンや海藻を増やす」「鉄橋の下では大きなシジミが獲れる」といったことを知り、鉄分が海の命の循環に大きく貢献していることを確信するに至った。

カキ養殖業という仕事は漁師の仕事のはずだが、じつは農業と同じだと知ったのは25年前。

カキの餌はおもに植物プランクトンなので、基本的には陸の植物と同じく光合成で増える。

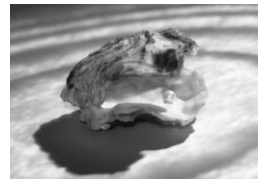
植物が育つのに最も基本的な養分は、鉄分だ。ところが、海は鉄分のない貧血状態。それは、鉄分が酸素と結合して沈下してしまうから。

しかし、森林や湿地帯の腐葉土で形成されるフルボ酸という成分が鉄分とキレート化して「フルボ酸鉄」になると、酸化しない鉄分になり、川から海に供給される。すると、海は豊堯の海となり、魚介類が豊富に育つようになる。(→イメージ)



畠山

2009年NPO法人畠山重篤さん  
森は海の恋人を設立



## せいせき朝顔市で“打ち水効果”アピール

7月6~7日に恒例の「せいせき朝顔市」が、聖蹟桜ヶ丘駅西口やヴィータ前のさくら広場などで開かれた。(→朝顔の鉢がずらりと)

ここには本命の朝顔の鉢がずらりと並べられ、購入して帰宅する客も多かったが、同時に売られた地元の野菜類は完売の状態、客のニーズがよくわかるようだった。また酒屋さんの団体は夏だからか、地元産梅酒の「白加賀」を売り場に並べていた。

スクエア側の横断歩道に近いテントでは、若い浴衣姿の娘さんたちが「打ち水」による路面の気温低下効果を実践して見せていた。打ち水前の温度が43℃だったのが打ち水後には33℃に下がったなど、実際に気温を測定し、それを表に書き入れて効果を通行人にアピールしていた。

梅雨明け後、一気に酷暑がやってきた日、かき氷が飛ぶように売れ、汗をふきふきの朝顔市だった。



打ち水効果をアピールするテント